

# コロナ時代の 仕事論

一橋大教授 楠木建氏

仕事にはコントロールできるところとできないところがあり、コントロールできないことを無理やりコントロールしようとするとロクなことにならない。だとすると、ここから2つのポイントが見えてくる。

第1に、何をどこまでコントロールできると考えるか。仕事の中心やそれを取り巻く状況、能力や持ち味に合わせて、どこまでコントロールでき、どこを所与の条件として受け入れるか。この見極めに個性や仕事のセンスが如実に表れる。仕事上での重要な成長のひとつは、見極めが早く的確になるということ。自分でコントロールできると自信を持てる領分が大きくなることもまた成長である。

第2に、仕事ではその人に固有の哲学が問われる。仕事はお客(自分以外の他

## 絶対悲観主義の勧め

者)に対する価値提供に他ならない。ところがお客さんばかりはコントロールが利かない。哲学がものを言わないことに直面したときだ。

絶対悲観主義が優れているのはその運用が著しくシ

「絶対悲観主義」。物事が自分の思い通りにうまくいくという期待をなるべく持たないようにする。何事においても「ま、うまくいかないだろうな……」で立ち回らなければならない」と構えておく。この悲観主義と呼んでいる。ベルナル・フォントネル(フランスの思想家)は「うまくいかないこと、それも大きな障害は、過度な幸福を期待することがある」。これだけ多くの人がそれなりに利害をかかえ自由意思で動いている。自分の思い通りにならないのが当たり前で、思い通りになることがあったとしたらそれは例外だ。

いくら経験を重ねても勝率を上げていく。年季の入

「自分はまた何者でもない」という認識からスタートするに越したことはない。若者にこそ絶対悲観主義の構えを勧めたい。気軽にフルスイングし、どんどん空振りする。若者の特権は「これから先が長くある」ではなく「まだ何にもない」ということにある。